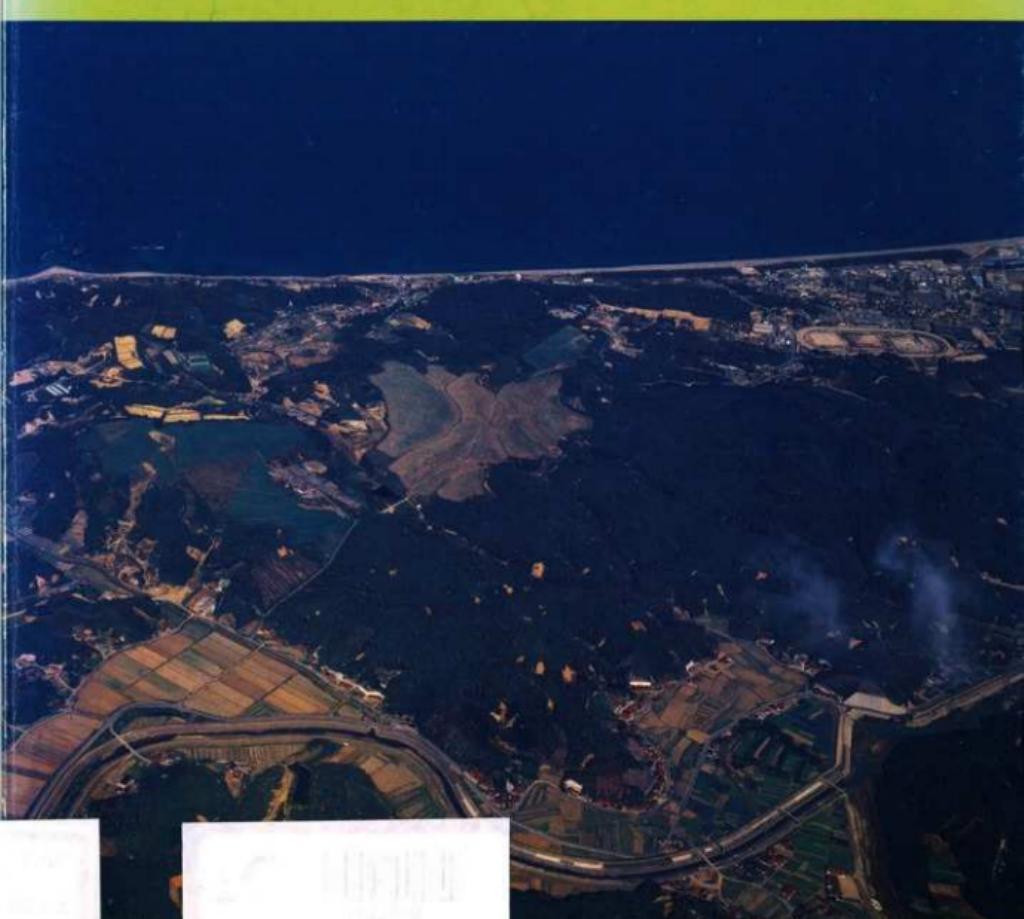


石見

空港建設予定地内遺跡発掘調査概報 I

—— 根ノ木田 フケ田平 北ヶ迫 ——



9年3月

島根県教育委員会

はじめに

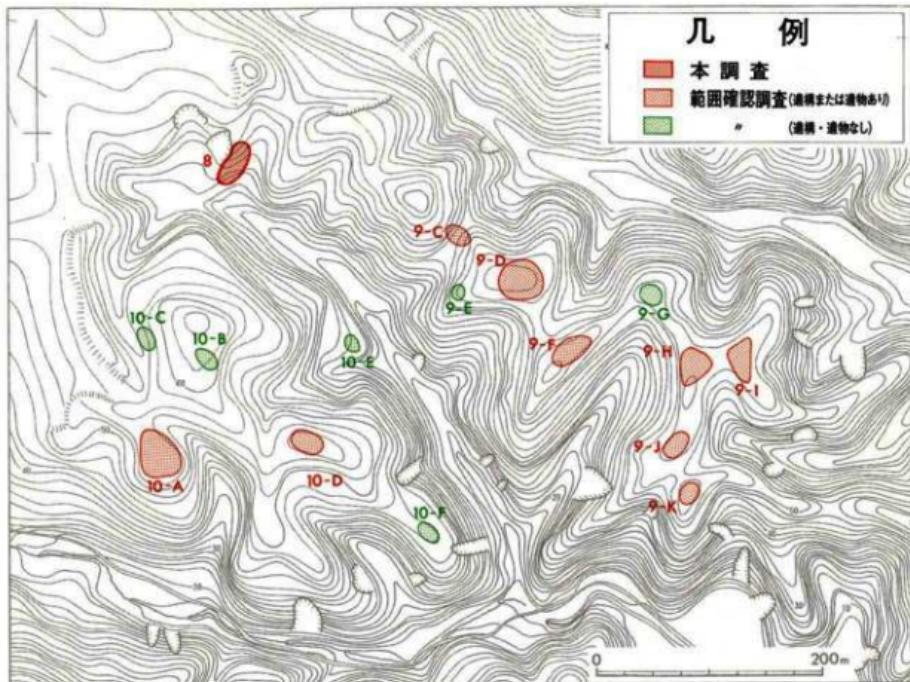
島根県は石見地域の経済・文化の活性化と高速交通網の整備を図るために、石見空港を益田市市原町他に設置する運びとなりました。同町は益田平野の西側に当り、また、空港建設予定地は日本海に臨む低丘陵上に位置し、付近には柳本神社や松ヶ丘遺跡などが知られ、古くから注目された地域です。

島根県教育委員会と益田市教育委員会は、昭和62年度に空港建設予定地内と周辺地域の約150ヘクタールにおいて遺跡の分布調査を実施しました。これにより、中世の古墳と近世末の瓦窯跡を各1基含む10ヶ所で遺跡と遺跡推定地を確認しました。島根県教育委員会は、島根県と協議を重ね、昭和63年度より調査に入ることとし、初年度である本年度は空港予定地の東側に当る第7～10地点を対象に7月より12月までの半年間にわたって、発掘調査を行いました。その結果、古墳時代前期の壺棺墓と中世の集石遺構および江戸時代末から明治時代の瓦窯跡等を検出し、以下に記述するような成果を得ました。なお、他の地点については今後調査を随時行う予定です。

- ▲ 窯業生産遺跡
- 集落遺跡、散布地
- 古墳、横穴墓、古墓
- △ 中、近世の城跡
- △ 寺院跡



遺跡の位置と周辺の遺跡



昭和63年度 発掘調査地点位置図

調査のあらまし

今年度の調査では市原谷遺跡、根ノ木田遺跡、フケ田平遺跡の3ヶ所について範囲確認調査を、北ヶ迫遺跡について本調査を実施しました。

根ノ木田遺跡（第9地点）では丘陵上の平坦部及び丘陵の鞍部の9ヶ所を選んで調査を行いました。（9のC～K）。そのうち遺構あるいは遺物が確認されたのが7ヶ所あり、そのほか2ヶ所では遺構、遺物とも検出できませんでした。

フケ田平遺跡（第10地点）では丘陵上の平坦部を中心に6ヶ所を選んで調査を行いました。（10のA～F）。そのうち遺構あるいは遺物が確認されたのは2ヶ所であり、その他4ヶ所では遺構、遺物とも検出できませんでした。

市原谷遺跡（第7地点）は調査前の観察で若干の高まりを持つように見えましたが、調査の結果、遺構・遺物とも確認できませんでした。

位置と環境

益田市は島根県の西端に位置しており、山口市へ向う国道9号線と下関市へ向う191号線の分岐点にあたり、山陰地方と山陽あるいは北九州地方を結ぶ交通の要衝にあたります。その地形をみると、市域は高津川と益田川の二大河川によって形成された沖積平野を中心に三方を低丘陵によって囲まれ、北は日本海へと広がります。

万葉の時代、歌聖と謳われた柿本人麻呂は少年時代をこの地で過ごし、高津の鴨山で生涯を開じたと伝えられています。また当地は益田氏の石見下向を機に一躍、石見文化の中心地として精彩を放つことになります。画聖雪舟によってつくられた、万福寺、医光寺の庭園はその一端を示すものといえるでしょう。

石見空港建設予定地は益田市西方の蟠竜湖および柿本神社に近い低丘陵地帯にあたり、北は持石海岸から遙か日本海を望む好遠望の地にあたります。南には白上川沿いに旧街道が走っており、陶土に恵まれた地域であることから瓦、日常雑器の生産が盛んな土地であったようです。

以下では今年度の調査の概要を述べ、当該地に包蔵されている文化財の一端を紹介してゆきましょう。

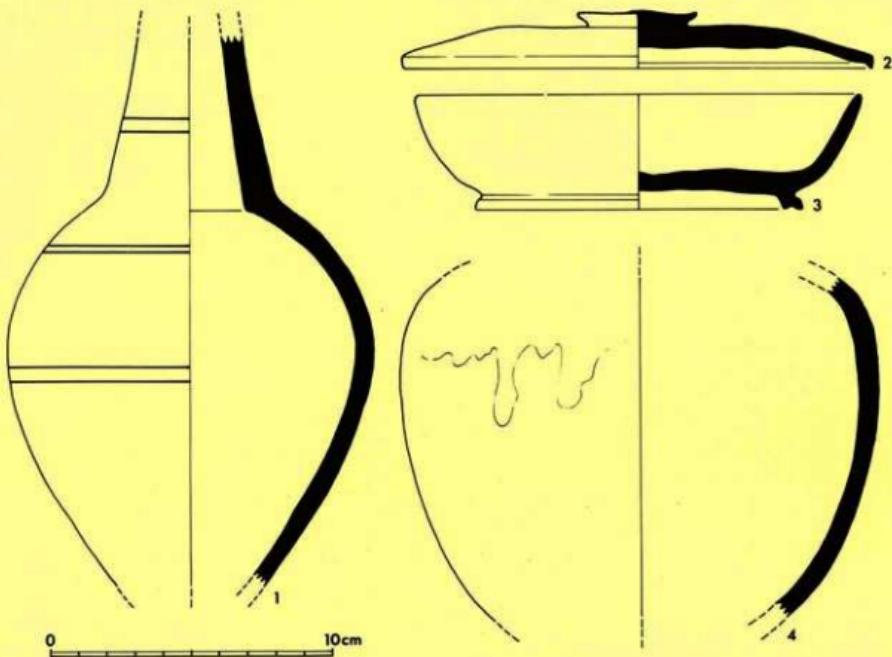
根ノ木田遺跡（第9地点）

C区では尾根の鞍部に堤防状の土盛りらしきものが現在の地形にみられたので発掘調査を行いました。調査の結果、表土下に黄褐色土と灰褐色砂質土を約80cmの高さに盛りあげている状態が明らかになりましたが、遺物は全く見つからず、築造された時期の決め手は得られませんでした。現在は山道として利用されていますし、また廿子地区と中西地区的境界の指標ともされているようですが、この堤防状遺構の本来の役割を明らかにするまでには至りませんでした。

D区には4ヶ所のトレンチ（発掘調査区）を設定しましたが、第3トレンチで土器が発見されましたので、周辺を拡張して発掘調査を行いました。土器はすべて表土中から破片で出土しており、遺構は検出できませんでした。現在、D区の尾根上は比較的平坦な地形を呈していますので、後世の耕作によって遺構が壊されたも



根ノ木田遺跡D区出土灰釉陶器



根ノ木田遺跡 D 区出土土器

かもしれません。土器は土師質大甕の口縁部と須恵器の長頸壺(1)・杯蓋(2)・杯身(3)などが出土していますが、特に灰釉陶器の壺(4)の出土は目を見張るものがあります。この灰釉陶器は愛知県の猿投山周辺で焼かれたもので高級品として使用されていたようです。今回のように発掘調査で出土したのは西日本においてもきわめて稀な例であるといえましょう。(なお、これらの土器はすべて平安時代のものと考えられ、他の時代の遺物は含まれていないと思われます。)今回の範囲確認調査においては遺物の広がりをおさえられる調査面積ではなかったので、さらに尾根の斜面部を含めて周辺を発掘調査する必要が生じました。

F区では第2トレンチの表土中から、サヌカイト(讃岐石)の剝片石器が1点出土しました。ここにおいても周辺を発掘調査する必要があるかと思われます。

H区からは古墳時代前期の壺棺墓を検出しました。縦85cm、横40cm、深さ15cmの楕円形の土壙に壺形土器を合わせ口の状態にして埋葬されていました。その合わせ口部には他の土器片でおおわれ、また片方の壺形土器の底部に他の壺形土器の口縁部が取り付けられていました。この壺形土器の口縁部は被葬者の頭位を示しているものかもしれません。なおこの壺形土器の口縁部の付



根ノ木田遺跡 H 区 壺棺墓

近には握拳大の円碟がまとまりをもって出土しています。なお壺棺墓は大きさを考えると、幼児以下の子供が葬られたものでしょうが、棺内に骨片や副葬品は見つかりませんでした。この壺棺墓周辺にも同様な埋葬遺構がないものかと、トレンチを拡張して発掘調査を行いましたが、確認できませんでした。しかし尾根の斜面部には未だ調査の手が加えられておらず、ここにもトレンチを入れる必要があるでしょう。この壺棺墓にはさまざまな埋葬形態が考えられますが、仮に周辺部まで発掘調査を行い、同様な遺構が検出できなかった場合、人里離れた山中にひっそりと埋葬しなければならなかつた特別な意味を考えなければならず、その意義は興味深いものです。

I 区からは表土中より須恵器の杯蓋(1)・杯身(2)や土師質の杯身が出土しています。これらの土器の時期は平安時代に属するものと考えられます。遺物の量はきわめて少なく、ここでは遺構を検出できませんでした。

J 区の第 1 トレンチからは表土中より古銭が 1 枚出土しました。その文字が読み取れないため、初鎬時期は明らかでありませんが、他に全く遺物が出土していないため、山仕事の最中に落としたという可能性もあります。

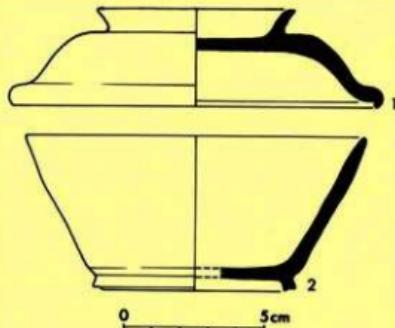
K 区からは縄文土器が 1 片出土します。ここでも表土中からであり、遺構に伴なものではあ

りません。ただ、径3m、深さ20cmの浅いⅢ状土坑が検出されていますが、遺物が全くみられず、人為的なものかどうか疑わしい感がします。単なる地山面の凹凸に上層の土が含まれていたものかもしれません。

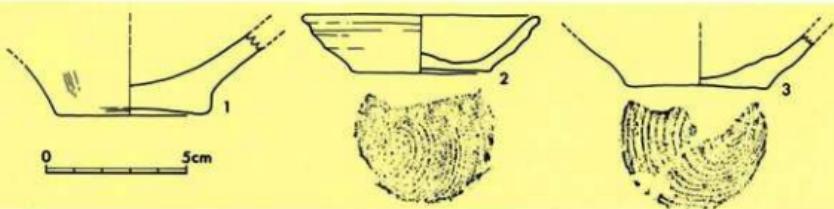
根ノ木田遺跡は、石見空港建設予定地内においては、白上川流域の小平野を臨む尾根筋と、絶好の位置にあり、今回の発掘調査において好成果をおさめるものと期待されておりました。調査前には遺跡の発見された尾根上には平坦面が多く、後世の人の手が加えられていると推測されており、そのためかどうかは明らかではありませんが、遺物は出土するものの遺構が検出できない場合が多くみられました。そのためにも人の手が加わっていないと思われる斜面部にも発掘調査の範囲を広げて、遺跡の実態をさらに解明していく必要があるでしょう。

フケ田平遺跡（第10地点）

A区では、現地形が比較的平坦な微地形を呈していましたが、発掘調査の結果、中央部が本来は谷状を呈していたことが明らかとなりました。この谷部の埋土から弥生土器の壺の底部片(1)が1片出土しました。おそらくより高い所から流れ込んだものでしょう。しかし周辺からは弥生時代の遺構や遺物は発見されませんでした。この谷部の斜面には握拳大の円礫を利用して列石をつくっていました。おそらく上部の土砂が谷部に流れ込まないための土止めの機能をはたしていましたものでしょうが、その築造時期は明らかではありません。ただ、生活跡をはじめとした遺構のようではなく、畠地などの基盤整備として構築されたものようです。またA区では地山の中からサヌカイト（讃岐石）の原石が多く発見されました。サヌカイトとは漆黒色の緻密な安山岩で、旧石器時代から石器の原材料として利用されていました。サヌカイトの原産地は全国的にみても限



根ノ木田遺跡 I 区出土土器



フケ田平遺跡出土土器



フケ田平遺跡D区集石遺構

られており、益田市の周辺では、広島県山県郡吉和町の冠山周辺が最も近い産地でありましたが、今回の発掘調査により新たな産地が発見されたといえるでしょう。根ノ木田遺跡F区から出土したサヌカイト製の剥片石器も冠山周辺から持ち込まれた原石を利用して製作されたものではなく、周辺で採取された石材を利用して製作されたものかもしれません。今後の科学的な分析によって、その点が解明されていくでしょう。

D区からは集石遺構が検出されました。人頭大の円礎を径6~7m、高さ約50cmの小さなマウンド状に積みあげており、集石の中にも丸く囲ったと思われる部分もみられました。この集石遺構は舌状に延びた尾根の最も高い地点に築かれており、見晴らしのきわめてよい位置を占めています。この集石遺構の南西部を中心にして土師質の杯、椀・皿（2、3）類の細片が多量に出土しましたが、これらの土師質土器は中世のもので、この集石遺構はその頃に築造されたと考えることができます。このような集石遺構は墓、あるいは経塚などの祭祀遺構である場合が多く、土師質土器の細片は集石遺構の前面での祭祀に伴なうものであると考えられます。土師質土器はこの集石遺構周辺のみでなく比較的離れた地点からも出土しているため、周辺にも発掘調査の範囲を広げて確認する必要があるでしょう。今回の調査では集石遺構を検出したのみで、今後の主体部調査に期待がかかります。

北ヶ迫遺跡（第8地点）

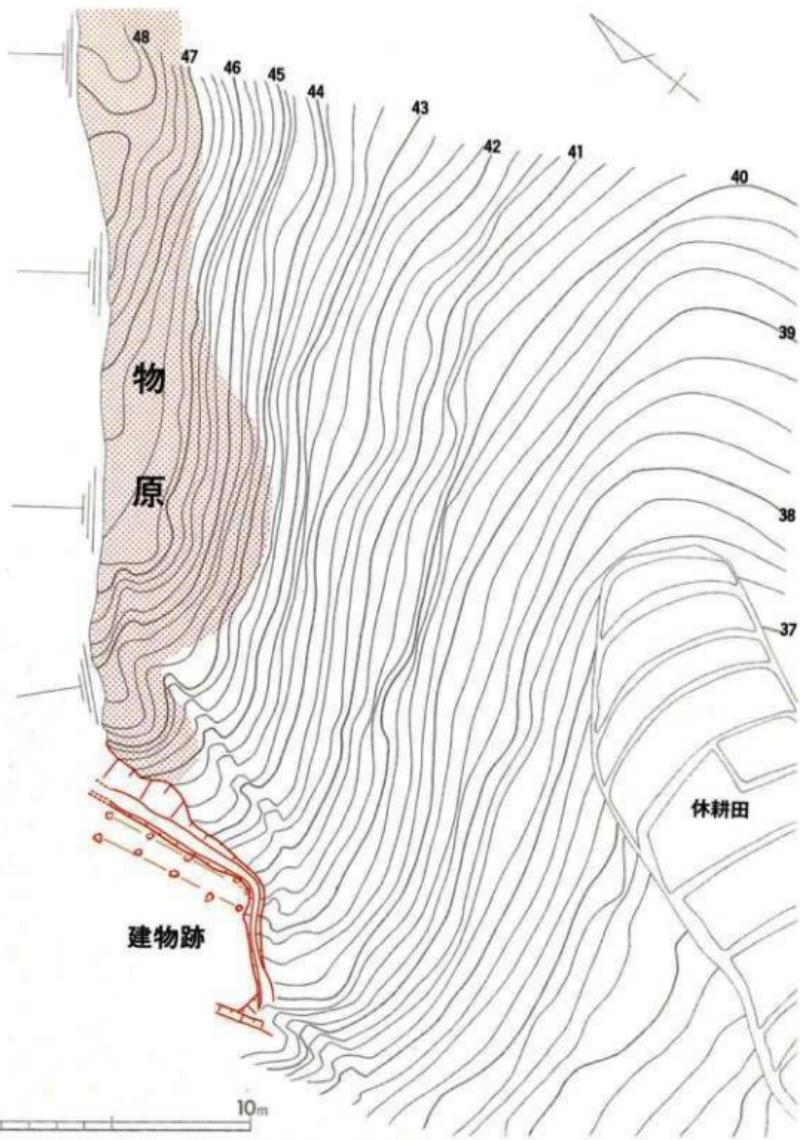
北ヶ迫遺跡は根ノ木田、フケ田平両遺跡のある丘陵に挟まれた狭長な谷の最奥で、昭和62年の分布調査によって「発見」された遺跡です。それ以前に島根県教育委員会では窯業生産遺跡の分布調査を実施した際、益田市内田町に瓦を生産した「佐々木窯跡」としてあげた遺跡がありましたが、その正確な位置がはっきりわかつていませんでした。今回、事前に周辺に住む人たちから、聞き取りを行い、北ヶ迫遺跡が「佐々木窯跡」と同一のものであることがわかりました。また、この窯をかつて経営していた人の子孫が隣町に在住されていることもわかり、この窯について詳しく知ることができました。その内容をまとめると次のようになります。

- この窯を経営したのは佐々木久之丞氏國という人物であった
- 氏國は石見国那賀郡宇野村（現在の浜田市宇野町）から移りすんだ人であった
- 窯場は元治元年から明治16年（1864～1883）の約20年間にわたり営まれた
- 窯場の操業には職人ら8人があたった

ただし、この窯では瓦だけでなく日常雑器も焼いていることが踏査で確認されているので、い



調 査 前 の 物 原



北ヶ迫遺跡地図測量図

わゆる「石州瓦」、「石見焼」の窯場であったと言えます。

発掘調査にあたっては、おもに窯場の構造と生産品の内容の把握を目的としておこないました。窯場は狭い谷につき出る尾根筋に位置し、窯場を構成するものとしては、焼き損じた不良品の棄て場の物原と建物跡が確認できました。しかし、窯本体については物原の一部とともに尾根筋にそった地すべり状のガケ崩れによって全く失われていて、その構造、規模を知ることができませんでした。

物原は尾根の上から斜面にかけ長さ30m以上、巾3~4mの範囲に広がっていましたが、写真でみると土に埋もれることなく瓦、日常雑器、窯道具の破片がおびただしく散乱していてまさに足の踏み場もないほどでした。尾根筋のガケ崩れを考慮すれば物原の範囲はもっと広かったと考えられます。

調査にあたっては物原での陶器や瓦の破片がどのように堆積しているかを知るために5m間隔の発掘区を設けておこないました。その結果、尾根上面では最大1mの厚さで堆積し、斜面下方にむかって次第に薄くなっている様子がうかがえました。物原の断面観察では若干の土を混えながらも瓦、窯道具、陶器の破片が多量に堆積していましたがわかりました。

物原の堆積物を量的に比較すると、瓦とそれを焼く際に使う窯道具が圧倒的に多く、写真にみるとその量は膨大なものでした。それに対し日常雑器はコンテナで60箱程度でした。

出土した瓦は「石州瓦」あるいは「石見瓦」と総称される赤瓦で、石見地方の民家の



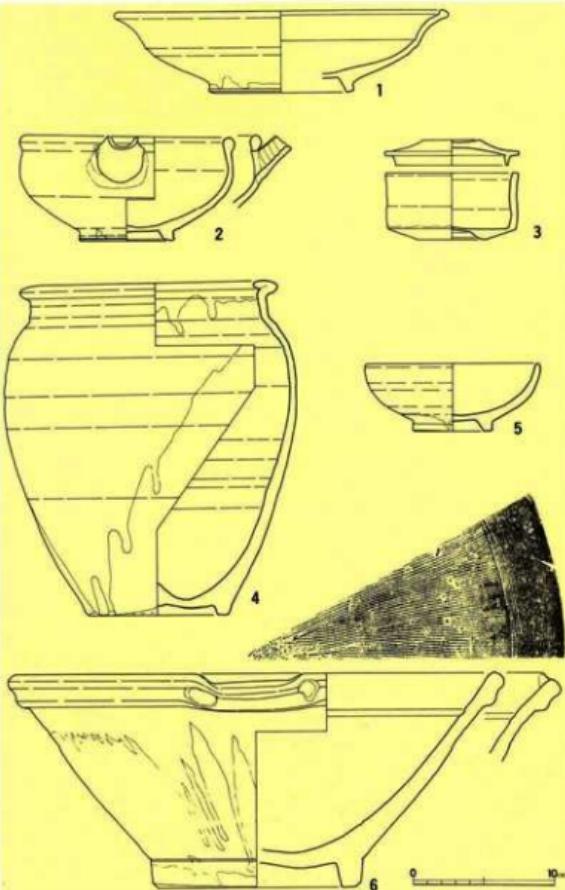
物原出土の瓦ともみうち

屋根で一般的に見られ、今日でも生産が続けられています。ただ、今日の赤瓦と違うのは色にむらあることでしょう。つまり瓦生産が今日のように近代化する以前は、焼成技術、釉薬の品質の改良が進んでおらず、出来上がった瓦の色にバラツキが生じてしまう訳です。石見地方の民家の瓦屋根の色を注意深く見ると、古い家と新しい家では色あいに違いがあり、それが瓦の作られた方の違いに由来することだとわかります。

瓦を焼く際に、瓦を立て並べて窯詰めをしますが、この時に台として使うのが写真にみられる棒状のもみうちで、並べた瓦が互いに熔着しないようにするために使われるのがクギ状のはせと呼ばれる道具です。

物原の大半が瓦とその窯道具で占められていることから瓦生産がこの窯で大きな役割を担っていたことが窺えます。

建物跡は尾根の先端近くを大きく削り出して作った平坦面でみつかりました。建物の規模は不明ですが、ほぼ等間隔に並ぶ5個の平石の列が平行して2本認められ山側の削り出したのり面に沿って溝が掘られていました。この溝の内側の肩には瓦が一列に貼り付けられた状態で出てきて



物原出土陶器
(1. 平鉢 2. 片口鉢 3. 蓋付小鉢 4. 甕 5. 椔 6. 擂鉢)

います。またこの平坦面の一角には登り窯のレンガを転用して作った炉もみつかっています。出土遺物には陶器片のほか若干の磁器の破片、「寛永通宝」などがありました。石列が礎石の列で、山側の溝が雨落ち溝とすれば瓦葺の建物である可能性があり、物原の出土遺物とかわらないものが出土していることから、窯場を構成する施設、例えば作業小屋、乾燥場等であったかもしれません。

日常雑器はコンテナ数で約60箱出土しましたが、これらは主に物原から出土したものです。種類別に見ると擂鉢、片口鉢、捏鉢、平鉢、角鉢、蓋付小鉢、徳利、急須、行平、椀、甕などがあります。

擂鉢は口径30~40cmのものが多く口縁の一ヶ所に片口をもち、擂目はかなり荒く密に施されています。縁の形は図示したタイプのものがほとんどで、1、2個丸縁のものがあるにすぎません。釉薬はおおむね褐色を呈するものですが色あいにはらつきあるようです。

片口鉢は口径15~20cmのもので、みな一様な注ぎ口をもったものです。釉薬は緑色系のものが多いようです。平鉢には大小のほか縁つくりに違いがありますが、図示したものはその一例です。淡青~淡緑色を呈する釉薬が使われています。

蓋付の小鉢は同じ大きさのもので、つまみのない蓋が特徴的です。灰白~淡緑色の釉薬がもちいられるようです。椀は、形、大きさ、釉薬の種類によって様々に異なるようです。

甕は石見地方で一般に飯銅と呼ばれていますが図示したものは小形品で、この他に大形品もみ



物 原 出 土 陶 器

うけられます。甕の特徴としてまずあげられるのは縁の形にあります。図のように縁先を内側に折り込み幅広の縁先をつくっている点では小・中形品を通じてみられるばかりでなく、装飾を施した甕についても同様の縁作りがみうけられます。釉薬は褐色系のものを中心に、暗緑色のものなどがあります。

釉薬を施したもののが製作途中に棄てられた素焼きの器もかなり出てきました。これらはヒビ割れなどして製品にはできなかつたものだと思われます。

物原出土のものはヒビ割れ、熔着、歪みなどを起こして実用には耐えられないものばかりですが、この窯の生産品の内容を知るうえでかかせない資料と言えます。

この他にこの窯で焼かれたものに土錘と人形があります。土錘とは魚とりに使う網のおもりのこと、材質こそちがいますが現在でも同じようなものを使用しています。日本海に近いので、浜辺の漁師からの注文で作ったものなのでしょうか。人形は2、3個体分の破片で、すべて型に粘土を押しあてて作った薄手のものです。破片はすべて素焼きで仕上げの色付けが施されていないので未完成品と思われます。土錘と人形——無関係な2つが同じ窯で焼かれたのは偶然かもしれませんが、注文次第では何でも作った石見の窯場の特徴の一端を示しているのかもしれません。

佐々木窯跡以外では尾根斜面の調査中に発見した炭焼き窯があります。これは幅1.8m奥行2.2mの焼成室に1.5mの焚き口をもち、奥に煙突がみられるものでした。現在稼動している炭焼き窯とは異なり、丘陵斜面に掘り込んでつくられていました。また焚き口付近には赤く焼けた痕跡のあるひとかかえほどの石がいくつか入ったくぼみがみられ、これも炭焼きに使つたものだと考えられます。出土遺物は全くありませんでしたが、土の堆積状況から判断すると佐々木窯跡よりも古いと思われます。

*

*

*

以上、佐々木窯跡を中心とした北ヶ迫遺跡の調査のあらましを述べましたが、未解明の点も多く残すことになりました。例えば、窯の構造とそれに付属する施設との関係があります。従来、生産された物の美術的あるいは民芸的な価値にのみ注意が払われてきましたが、それらを生み出す舞台となった窯や作業小屋といった窯場の様子については記録が少なく不明な点多いようです。佐々木窯跡では窯場の残り具合があまり良くなかったため、この点については充分な成果をあげるには至りませんでした。

佐々木窯跡の周辺には喜阿弥焼、白上焼など幕末以降に営まれた窯場があり、ここが豊富な陶土と交通上の利点をバックに益田の窯業生産に大きな位置を占めた地域だと思われます。しかし、周辺の窯場について詳しく調べられていないため、佐々木窯跡の特徴を比較検討のうえで述べることができないのが現状です。この点については今後の調査・研究の進展を待つて行わなければいけないでしょう。

おわりに

以上のように今年度の石見空港建設予定地内遺跡の調査で、古墳時代の壺棺、中世の集石遺構および近世末の焼き物の窯跡など、益田市のあゆみを語る上で不可欠ともいえる資料を得て無事終了しました。

ご承知のように、益田市は石見でも古くからひらけた土地柄であり、数多くの文化財を残し今日に至っていますが、新しく発見された資料もその一つでありこの小冊子が多少なりとも地域史の理解に役立てば幸です。

最後になりましたが、今回の調査にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、記して感謝したいと思います。

愛知県陶磁資料館、瀬戸市歴史民俗資料館、益田市教育委員会、島根県上木部港湾課(空港整備室)、島根県石見空港建設事務所

伊藤晴明、伊藤フサノ、伊藤好美、岩本末子、岩本哲夫、大賀キミエ、大久保真紀、大島操、大庭忠、大畑真二、加藤五代、加藤康友、木原光、喜村皓司、久保田久子、桑原一二子、桑原喜雄、佐々木二良、上代直文、杉内恵美子、宅野千義、宅野マシ子、宅野好雄、田中義昭、田原澄子、近重克幸、中島陸輔、仲野泰裕、永安ユキエ、野津幸夫、原宏子、藤澤良祐、藤本勲、藤本農、宮本徳昭、椋木義幸、村上勇、山地裕子(敬称略)

木冊子の執筆、編集には文化課埋蔵文化財第3係
係長 ト部吉博、文化財保護主事 西尾克己
主事 原田昭一、主事 熱川貴保があたりました。)

石見空港建設予定地内遺跡発掘調査概報 I —根ノ木田 カケ田平 北ヶ迫—

発行 1989年3月31日

編集 島根県教育委員会

〒690 松江市殿町1番地

Tel 0852-22-5946

印刷 黒潮社